『イエスの言葉をめぐる思い』ヨハネ10：19-21

10:19 これらの言葉を語られたため、ユダヤ人の間にまたも分争が生じた。
10:20 そのうちの多くの者が言った、「彼は悪霊に取りつかれて、気が狂っている。どうして、あなたがたはその言うことを聞くのか」。
10:21 他の人々は言った、「それは悪霊に取りつかれた者の言葉ではない。悪霊は盲人の目をあけることができようか」。

●序論
お気づきの方もおられると思いますが、イエスさまを前にして人々の間にこのような分裂が、これまでも記されています。
今、イエスさまの言葉を聞いて、その指導者たちの間で紛争が起こっています。
　イエスさまはご自分を「羊の門」、「10:11 わたしはよい羊飼である。よい羊飼は、羊のために命を捨てる」とも言われた。また「わたしがきたのは、羊に命を得させ、豊かに得させるためである。」とも言われた、それらの言葉を聞いてです。

人々が、イエスさまの一連の奇跡や言葉を聞き取る事、理解することに非常に苦労していたことが分かります。
　　言葉が届くという背景にはそこに信頼関係があるということを、私たちは気づくことがあるでしょう。　この人の言うことなら大丈夫、信頼できるという風に。
　　しかし、今日のところではそれは見えません。

イエスさまの前で紛争していた人たちの思いあったのは、イエスさまの言葉への信仰による応答ではなく、それぞれの感じるままの「反応」「評価」していただけでした。
　彼らは、イエスさまを主として呼ぶような、関係に入ろうとはしませんでした。信頼して応答するに至らなかったということです。
先週、あのイエスさまが言われた羊の門を通るならば、自由に良き牧草地を出入りすることができる…と書いてあるとお話しました。そこに広がるのは、どんな人でも、ただ信じて入るならば救われるという恵みの世界です。恵み世界を用意してイエスさまはそこで語っておられたのです。　先週も上げたシンプルな御言葉を。

　エペソ2:8　あなたがたの救われたのは、実に、恵みにより、信仰によるのである。

●本論
Ⅰ．その反応の背景にある思い
　　10:19 これらの言葉を語られたため、ユダヤ人の間にまたも分争が生じた。
　　10:20 そのうちの多くの者が言った、「彼は悪霊に取りつかれて、気が狂っている。どうして、あなたがたはその言うことを聞くのか」。

「悪霊に取りつかれている」という表現は、ある意味便利な言葉で、自分たちの理解できないことや受け入れられないことを、相手のせいにして非難する言葉です。

そういう意味で、実は自分が「霊的盲目」でありながら、そういう自覚がない。
イエスさまが言われていた通りです。

ヨハネ9:41 イエスは彼らに言われた、「もしあなたがたが盲人であったなら、罪はなかったであろう。しかし、今あなたがたが『見える』と言い張るところに、あなたがたの罪がある。

またもう一方の人たちについて

10:21 他の人々は言った、「それは悪霊に取りつかれた者の言葉ではない。悪霊は盲人の目をあけることができようか」。

まだ不確実ではありましたが、この人たちはイエスさまについて、もしかしたら･･･この方はキリストかも…という思いもあったかもしれません。

今回は、イエスさまの言葉をめぐるこの二通りの評価のもとで対立・紛糾ました。
ヘブル人への手紙の中にこんな一文があります。

ヘブル4:12

というのは、神の言は生きていて、力があり、もろ刃のつるぎよりも鋭くて、精神と霊魂と、関節と骨髄とを切り離すまでに刺しとおして、心の思いと志とを見分けることができる。

ここにある人々の反応はすなわち、イエスさまの存在とその言葉をめぐっての強烈な反応だったのだということです。

Ⅱ．その言葉から離れていないか

ヨハネはこれまでもイエス・キリストの存在と言葉をめぐって、人の反応を語りますが、それを通して同時そこに裁きがあるとも語ります。

ヨハネ3:19-20

そのさばきというのは、光がこの世にきたのに、人々はそのおこないが悪いために、光よりもやみの方を愛したことである。
悪を行っている者はみな光を憎む。そして、そのおこないが明るみに出されるのを恐れて、光にこようとはしない。

「光よりも闇を愛し」「光に来ようとしない」。それがその言葉をめぐる反応であり応答でもあります。

あえて自分から少し離れたところで、イエスさまの言葉を置いて、その声を真正面からではなく、斜め横から聞く。まさに斜に構えて評価するようなありさまです。

Ⅲ．（だから今こそ）信仰の応答をしたい
今日お読みしているところは、羊飼いとその羊たちの姿をイエスさまがお話になった後の人々の反応のありさまでした。

羊飼いと羊、そこにはとても良い信頼関係があった。だからこう表現されています。
10:3･･･羊は彼の声を聞く。そして彼は自分の羊の名をよんで連れ出す。 自分の羊をみな出してしまうと、彼は羊の先頭に立って行く。羊はその声を知っているので、彼について行くのである。

わたしたちは、しばしば神に、キリストに聴き従いなさいという言葉を聞きます。
しかしこの言葉に、窮屈さ、不自由さを感じたことはありませんか？

子どもの頃のわたしは複雑でした。ある時には、聖書のお話でイエスさまの言葉を聞いて、心が喜びに満たされたときも、事実ありました。
でも一方でわたしは、キリストに従うということを、とても窮屈なものと思うようにもなっていたのです。
結果、神なき自由を求め、一方で神さまありきの守りや安心を求めている、なんともいい加減な、ご都合主義な自分となっていました。

ヘブル語で「従いなさい」という言葉の文字通りの意味は、じつは「声に聞きなさい」という意味だと言います。
その声を、誰のどんな思いのこもった声であるとして聴いているだろうか？…それがここ数回のメッセージの中で皆さんとともに耳を傾けてきた事柄です。

それはイエスさまの声です。
10:14 わたしはよい羊飼であって、わたしの羊を知り、わたしの羊はまた、わたしを知っている。
10:15 それはちょうど、父がわたしを知っておられ、わたしが父を知っているのと同じである。そして、わたしは羊のために命を捨てるのである。

わたしは、挫折の経験を通して、その御言葉、その声は、わたしのためにご自分の命をも捨ててくださるほどにわたし愛し、わたしに関わり、わたしを探し求めてくださる方のみ声だとわかるようになりました。
そこから、以前は不自由さを感じていた、信仰の世界が最も安心できる自由な祝福の世界だとわかったのです。そうしてはじめてこの御言葉もわかりました。
10:9 わたしは門である。わたしをとおってはいる者は救われ、また出入りし、牧草にありつくであろう。

そう、ここに安心できる自由があり、祝福がある。わたしはイエス・キリストを信じることで、その門をくぐり大きな恵みの世界に迎え入れていただいたのです。

さいごに）　聖書の中にもある意味そういう人が幾人も紹介されています。
そのひとりが、イエスさまの弟であったヤコブでした。
このヤコブは、イエスさまの弟でした。弟でしたが、イエスさまを救い主として本当の意味で信じたのは、イエスさまの十字架と復活以降のことです。

そばにいるからこそ反発し、また受け入れきれない…そういうジレンマもあったかもしれません。
のちに、初代教会のリーダーとなっていくこのヤコブはその手紙の最初にこう自分のことを表現しました。
ヤコブ1:1 神と主イエス・キリストとの僕ヤコブ･･･

そこには、自分をイエスの兄弟とする肩書なく、ただ救われて僕としていただいたということをあらわす、短く真実な自己紹介です。
そういう彼は、かつてすなおに聞けなかった兄イエスさまの言葉を巡ってこう勧めています。
ヤコブ1:21
だから、すべての汚れや、はなはだしい悪を捨て去って、心に植えつけられている御言を、すなおに受け入れなさい。御言には、あなたがたのたましいを救う力がある。

先日の75周年記念聖会の中で、講師のイ・ヨンフン先生は、リバイバルの鍵として「悔い改め」を語ってくださいました。
それは、神さまとの関係を回復することです。
イエスさまを羊飼いとして、自分は羊として、生きていく上でかけがえのない関係の中に、信仰の応答を持って入って行くことです。
そうして初めて、わたしたちはイエスさまと共に歩む歩みがクリアにされます。
そこから恵みの世界は更にはっきりとわたしたちの命の内に働くことを経験できるのです。　実際にイエスさまは言われました。
:10　･･･わたしがきたのは、羊に命を得させ、豊かに得させるためである。

わたしたちにイエスさまは命に満ちた生き生きとした祝福をくださいます。
大胆にこの命を、受け取る祝福を再確認し、豊かに受けさせていただきましょう。